
初めての夏

えみりあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めての夏

【Zコード】

N1387N

【作者名】

えみりあ

【あらすじ】

15歳の葵は、年上の少女にありがちな劣等感を抱きながらも、平穀な生活を送っていた。平凡とういうわけではないが、裕福な家に生まれた葵は一般庶民と変わらない生活を送っている。ある日、一人の美形な男に出会った。カッコいいのにどこかぬけた男に惹かれながら、だんだん自分らしさを見つめていく葵。傍観主体制の主人公が送る、何でもありの明るいさわやかなラブコメストーリー。

初めましては

私は、一般的で、どこか秀でたところのあるような少女ではなかつた。

その事実は、誰も侵すことのない私にとっての絶対的な事実で。

いつか、誰かが言つた。

「自分ばかりが可哀そう、悲劇のヒロインをどりかい？」

その言葉は、とても癪に障つた。

そいつのことを、一発殴つてやるうと本氣で思つた。

でも、その人が言つたのだ。

「君は、もつと自分を認めてあげたらどうだい？」

満面の笑みで。

太陽の下にさらされたその人の顔は、自分のことのように嬉しそうに、わが子を見守るかのように暖かげに微笑んでいた。

私は、その夏を忘れないだらう。

蝉がうるさくて苛々しながらも、あの人の傍にいるだけで、気持ち
が和らいだあの夏を。

「…………」

最近は蝉の鳴き声が煩わしく感じられるようになった。

毎日毎日、暑さがつて……

読んでいた本を閉じ、ソファーから体を上げる。

「隣の工事もひるむやう……」

最近、隣に家が建ち始めた。

長い間駐車場であった広い土地には、3軒の家が建つやつだ。

「…………」

「善良な市民に対する配慮つてものはないのかね~」

近くにあつたクッショソで耳をふむてみると、気休め程度だ。

「だーれーが、善良な市民よ。」

「いたつ……新聞紙で頭叩かないでくれます~？お母さんと違つて纖細なんだから。」

「どー」が纖細よ、どーがーーの間、あんたハエを素手で捕まえてたでしょ！」

母の手にある丸めた新聞紙で頭をつつかれる。

「ちよつ、髪の毛ぐしゃぐしゃになるからー。」

「誰も見る人いないでしょ。」

母は葵をいじるのに飽きたのか、丸めた新聞紙を元に戻し、読み始めた。

「へえ~。この子、あんたと同じ年だつてよ。世の中つてもんは、皮肉だねえ。」

母が開いた先には、「超新星！矢野葵」の見出しが。

「無名の新人が、映画の主演に決まつたんだってさ。綺麗な顔してるねえ。あんたと同じ名前で、同じ年。しかも男なのに、あんたよりも綺麗な顔しているじゃない。」

「そういう子は、小さい頃から可愛い可愛いと言われて、有頂天になつているようなタイプなんだから。私は綺麗に生まれてそんな風に育たなくてよかったですと思つてるわよ。」

「負け惜しみを盡つんぢやないよ。あんたは、可愛い子だね。」

「

「可愛いなくて結構……お母さんから生まれたんだから可愛いはずが無いじゃないの！」

「まつ懲たらしきーー！」

母が何か言つているが、そんなことも耳に入らない。

私だって、もつと可愛い生まれたかったわよー。

鼻だつてもつとスラッと高く、田だつてもつとパツチリしていたら良かつた！！

「私、図書館行ってくる。」

こんなひつひつい家にはもう居たくはない。

静かな図書館にでも行こう。課題作文の本でも探そう。

「お～、行つて来い、行つて来い！あんたがいなくてこの家ももう少しは静かになるだらうね。」

そんな母の言葉を内心怒りながら、部屋着からワンピースに着替えた。

鞄に携帯と財布を詰め込み、少しづづ少しづづ鳴るお腹を押さえながら、家を出た。

不思議な男

「あつ～～～～～」

外は灼熱地獄と言つていよいよどの暑さ。

熱中症の人が多い理由が窺がえる。

「図書館に行くのは止めだ～～～。」

長い時間をかけて図書館まで行く体力が無いと分かった葵は、近くの大手本屋に入った。

中は比較的空いており、広い店内に数人の男女がいるのみだ。

「あの小説、ないかな～。」

少し前から気になつて新星作家の小説。

ホラーなのにギャグも盛り込まれている話題の一冊。

これだけ広いならば、中々見つからないだろうと察した葵は、検索機で見つけることにした。

「本の名前は、確か・・・・・」

記憶を手掛かりに名前を探しだす。

「青い夏、じゃないかな、おじょーさん。」

後ろからした声に、振り返る。

そこには、中々の美青年。

「何で・・・?」

「お嬢さん、さつきからボソボソ呟いていたから。ギャグとホラーの小説とか、新星作家のやつ、とか。」

「あ、そうでしたか・・・。ありがとうございます。では・・・」

イケメンにしゃべりかけられたのは嬉しいが、自分の恥ずかしい姿を見られたのは嫌なことだ。

しかも、初めて会った女性に對してこきなり話しかけるのは非常識ではないか？

少し、苦手なタイプっぽいな・・・。

検索機から本の位置を印刷し、レシートのよつなその紙を握りしめて、何処かを探す。

「これか。」

田の前に店員の手書きのポップ。

カラフルなペンで書かれたそれは、周りから少し浮いているが、それでも異彩を放っている。

一冊手に取り、パラパラとページをめくる。

田に留まつたのは、クライマックスのシーン。

ネタバレを気にするような性格でもないので、そのまま読み進めてみる。

主人公の少女は、とある町に引っ越してきた。

大きくもなく小さくもないその町を少女は好きになり、周りとも打ち解ける。

だが、少女が引っ越してきてから半年経ったころ、町から出られないうことに気づく。

町の人はそのことに気づいておらず、その事実を知っているのは少女だけ。

少女は町から出ようと試みるが、何をしても無駄だと悟る。

ついに少女は出られる方法を見つけ、出られたが・・・・・・・・

「その町 자체がこの世界だと知る、か。」

内容は暗いもので暗くなく、怖いもので怖くはない。

ホラーと銘打っているだけあって、怖さもあるが、爽快さもある不可思議な小説だ。

人気な理由がわかつたわ・・・。

そのままレジに持つていき、会計を済ます。

家に帰つても、ゆつくつと本を読めない」とは分かつてゐるので、近くのカフェに入ることにした。

奥の方の席へ案内され、カフェオレとチーズケーキを頼んだ。

出されたカフェオレを飲みながら、少しづつ読み進める。

主人公に感情移入しながら、ハラハラドキドキしながら読める。

「おじょーさん、それ、面白い？」

声をかけられ、振り返ると、すゞ後ろの席に先ほどの男がいた。

「あつ、さつきのー」

「さつきはさびーも、」

へラへラ笑いながらこちらに向かつて手を振つてゐる。

「まだ少ししか読んでいないので・・・。でも、すゞく面白いです」

素直に感想を語りこみる。

「エリちゃんが？」

「えっと、主人公が町から出られないのに悲観せずに、逆に楽観的に捉えてるところとか、ホラーなのに爽快感があるところとか、かな？」

変な人……。そんなこと聞いてくるなんて……。

「やつか~。」

「あ、はい……。」

「お嬢さん、俺のこと変な奴って思つてるでしょ？」

悪戯つ子の様な田で見られると、返事を返せず、「うう」とつまる。

「いいね~、可愛いやつに反応~。そういうのを期待してたんだよ。」

「い、いえ~初めて会つたのに、随分と親しくしてくるな~って……。

・

笑いを堪えられなかつたのか、思いつきり笑い始めた。

「それって、こいつ馴れ馴れしいな～って言つてるのと同じだよー。君、素直な子だね～！」

「それが取り柄ですから・・・・・・」

言つて恥ずかしくなつてきた・・・・・・！

何だ、この人！！

「俺さ、その本の大つファンなのよ。だから、お嬢さんの意見も聞きたいやつで」

「まだ、読み終わつていないので、何とも言えないとんですが・・・・・」

「携帯、貸してくれない？」と言われたので、素直に携帯を貸す。

彼も自分の携帯を出して、何か操作し始めた。

「いや、俺のメアド。」

葵の携帯の画面には、その男の名前「立川斎」の文字が。

「勝手に携帯に登録するなんて、どこの恋愛小説の登場人物だよって感じだよね~」

内心大きく頷く。

「読み終わったら、感想くれないかな? 嫌なら、俺のメアド消去しちゃつていいからさ。」

「じゃあ強要しないんだ……！」

「じゃーね、おじょーさん」

その男は飲みかけのコーヒーをそのままにして去つて行った。

カツコよく颯爽と出ていくのかと思つたら、途中でイスにつまづいて転びそうになつていた。

「 」 いちをみながら歩いているからだよ、謎のイケメンさん。」

恋愛小説みたいな展開を期待してはいないけれど、何もなかつた夏が、楽しくなりそうな気がした。

所詮はただのオントのナ

結局、謎のイケメンにはメールをしなかった。

メールアドレスを消去することもできなかつたが、メールをすることができなかつた。

彼は自分からメールを送つてくることはしなかつたので、昨日のことが夢のようにも思えた。

「何だつたんだろ、昨日のこと……」

そんなことを思いながら、今日は学校へ登校している。

携帯を片手に、人であふれた駅のホームで電車を待つてているのだ。

「面倒だな、学校。」

今日葵が学校へ行かなければならぬ理由として一番に上げられるのは、課題に必要な教科書を学校に忘れてしまつたからだろう。

そうでなければ、せつかくの夏休みを学校に行くことで使つたりはしないだろう。

傍から見たらお嬢様の様な姿をしている葵。

白いブラウスに、薄紅色のネクタイ。スカートは黒に赤のチェックが入っている。

その制服に負けぬように、年ごろの女の子らしく胸まである髪をウエーブさせ、教師にバレない程度の化粧も施してある。

葵の好きな「ゴシップガール」のブレアをイメージしているのだ。

ニューヨークを舞台に、セレブを主人公にした海外ドラマ「ゴシップガール」。

その煌びやかな世界に、葵はいつでも憧れていた。

その影響もあって、今の学校を選んだのだから。

電車の待ち時間の間に、葵の生い立ちについて話せてもらおう。

本名「みなもとあおい皆本葵」。

貧乏だが、愛情あふれる家庭に育つた、というわけではなく、父親は大手弁護士事務所を経営する社長である。母親は旧家の出に対し、夢見る少女に育たなかつた現実主義だ。

それなので、家は高級住宅街にある、憧れである「ゴシップガール」

のブレアとは負けず劣らずの存在である。

「」で、セレブの少女が誰もかれもが美少女とは思わないでほしい。母親はそれなりに整った顔だが、そこまで秀でているわけでもないし、父親もしかり。

勉強に対するさほどどの関心は無く・・・・いや、本当は関心はあるのだがそこまで頭がよろしいわけではない。

今の中学校には、「名門」の看板が掛かっているので、それなり以上の頭の良さを要求されるのだが、足りない部分は「」でカバーと云つた金持ちの「イヤミ」を發揮した。

そのことに對しては多少罪悪感はあるのだが、周囲にもそういう者はいるので、「しょうがないか。」で済ましい。

「」までくると、ただの嫌みな金持ちだよねえ。

「」は言つが、そこまで「金持ち」といった生活はしてはない。

住居はまあ大きいが、いつも食べるものは母親手作りのスーパーで買った食材の「ご飯だ。

小遣いもさほど普通の家と変わらない。

携帯代を抜きにして、月10000円ほどなのだから。

だから、買いたいものを何でもかんでも買えるというわけではないし、「節約」という言葉を身をもつて何度も体験している。

友人と遊ぶのも、「今日は青山で、クラブのイベントがあるんだけど」なんて風にはいかないし、「クラブ」なんて、もつての外である。

学校の通学方法も、運転手つきの高級車ではなく、人にもみくちゃにされながらの命がけの電車通学である。

「…」

「…」

さあ、電車が来たので「皆本葵」については「れぐら」で。

「あつ～～～～～」

灼熱地獄の中、やつとの思いで学校に到着した。

教室までの長い道のりをダラダラと歩き、「1-C」と書かれた札の掛かっている教室に入る。

中には当然誰もいないし、誰もいないのだから冷房もかかってはない。

「ど」だー、教科書」

自分の机の中を手さぐりで探すが、何か入っている気配はない。

「ロッカーかな？」

教室からの後に設置されているロッカー。

必要のない教科書類はすべてこの中にいれである。

「あれ、開かない！？」

鍵を差し込み、力チャヤという音を確認してから引つ張つたはずなのだが、開く気配が無い。

「うう、こんいやひ～・・・」

力いっぱい引つ張るが、これまた開く気配が無い。

ギシギシ音がし、これ以上力任せに開けようとしたら壊れてしまいそうで怖い。

「どうしよ・・・」

友達に教科書を借りるか、なんて諦めモード全開の時だつた。

「あれ、皆本さん？」

そこにいたのは、同じクラスの「御堂薰」。

「学園の王子様！」をまさに体現したような人物だ。

一年生ながらサッカー部のエース。

引き締まった体に、小麦色に焼けた肌。

それなのに人懐っこいそうな愛らしい容姿をしているので、2・3年のお姉さま方には大変人気だ。

まあ、一年生にもだけど……。

スポーツだけでなく、勉学まで優秀、それに加えて家は代々続く名門の家柄だ。

すつごく良い物件だよね……。

内心失礼なことを考えながら、いつも彼より後ろの席から眺めていた。

あまり彼自身には興味は無かつたし……。いや少しミーハーな所もあつたが、そこまで表に出るタイプでも無いので、傍観体制に入っていた。

そんな王子様がどうしてここにいるのだろう……。

「御堂君……？」

「皆本さん、足、太もも見えてるよ……。」

彼の顔が何故か赤く染まっている。

これがお姉さま方を虜にする魅惑の容姿なのだろうか……。

彼の言う「見えてる」は何なんだろうか？

「へえ？」

自分の体勢を思い出すと、ロツカーの取っ手に両手をかけ、左足を隣のロツカーで踏ん張らせている。

葵の白い太ももはもうあられもないほどに見えている。

これがいわゆるちらリズムかな……。

「あっ、ああー!」、「めんね!！」

急いでその体勢を崩す。

「ロツカー、開かないの?」

大きさなほど大きく首を振る。

「古いからね～、ここのロッカー。ちょっと貸して」

そう言って、ロッカーをガタガタと言わせると、いつの間にか扉が開いていた。

「はい、どうぞ」

それはもう爽やかな「どうぞ」だった。

「俺がやつてやつたんだぞ！」といったドヤ顔をすることなく、「当たり前だよ」といったような優しさを含んでの「どうぞ」だ。

「ありがとーーー！」

開けてもらったロッカーの中から必要な教科書を取り出す。

「でも、何で御堂君は学校にいるの？」

「俺？俺はさ、教科書忘れちやつて」

「恥ずかしいだろ?」なんて言っている様からは、お姉さま方に人気な理由が窺がえる。

「もしかして、世界史?」

「何でわかつたの!? そつなんだよ、世界史忘れたんだよ~」

「私も世界史忘れたから今日取りに来たの」

「世界史って分厚いから、持つて帰る気になれなったんだよ、夏休み前の俺!」

白い歯を見せて笑う。

王子様って、こんな感じなのかな。

「そりだよね、600グラムもあるんだから世界史の教科書つてー!」

「皆本さん量つたの!?」

「入学した時にね。あまりに重かつたから」

御堂は大声で笑い始めた。

「「」めつ！何か、皆本さんつてそんなバカみたいなことするんだつて思つたらさ、「

「私だつてするよ、そういうことー！」

「何か、皆本さんつて気難しそうなイメージだつたからさー…意外だな～」

「私つて、気難しそう？」

「ちょっとね。委員長！つて感じがするタイプだな～つて俺は思つてた。でもさ、なんか違つた！」

傍観主でいようとしたのに、このハニカミ笑顔は胸にズキュズキュくるわ・・・。

「わ、私、もう帰らないと…！」

急いで教科書を鞄にしまいこみ、早足で教室を飛び出した。

登場人物

みなもと あおい
眞本 葵

名門の高校に通う15歳。

父親は大手弁護士事務所経営の中々のセレブ。

だが、ふたを開け見れば一般庶民と大差の無い生活を送っている。

「夢見る少女じゃない」がモットーの現実主義者。そこは母親譲りである。

顔は日本人の典型タイプ。自分では「もっと目がパッチリしていたら」「もっと鼻がスラリと高かつたら」と、いろいろとコンプレックスはある。

学校には、「コネ」入学である。本人はそこいらへんにすごく罪悪感を覚えているわけではない。

たちかわ いつき
立川 斎

自称年齢23歳。

何をしているかわからない不思議な人。

美形というべきの、古風な顔のイケメン。

初めて会った葵にいきなり声をかけるなど、何を考えているかわからない所があるが、どこかぬけているので、少し安心して一緒にいられるタイプ。

御堂 みどう
薰 かおる

葵と同じクラスに通う高校一年生。

一年生ながらもサッカー部のエースをしており、運動神経抜群。

それに加えて勉強までできて、顔まで良い、いわゆる「学園の王子様」である。

代々続く名門の家柄の御曹司。

裏表のない性格をしており、人懐っこさも加わって、2・3年のお姉さま方に大人気。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1387n/>

初めての夏

2010年10月9日18時53分発行